

統一テーマ「ロマンス諸語における通時変化」

福嶋教隆（とりまとめ）

§ 1 はじめに

日本ロマンス語学会第 49 回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における通時変化」であった。この枠内で川崎義史、土屋亮、寺崎英樹、今田良信、鈴木信五（敬称略、以下同様）の 5 名が発表（持ち時間各 20 分）を行なった。川崎、土屋はスペイン語統語論、寺崎はスペイン語形態論、今田はフランス語統語論、鈴木はイタリア語統語論に関する問題を論じた。休憩を挟んで、総合討議が本稿筆者の司会のもとで行なわれた。このうち川崎、寺崎、今田、鈴木の発表は、論文として本号に掲載されている。

§ 2 総合討議と質疑応答

以下に総合討議のもととなる研究発表の要旨と、それを巡って行なわれた討議の概略を記す。

(1) 川崎義史「cerca el pueblo から cerca del pueblo へ —CODEA による前置詞・前置詞句の通時的変化—」

この発表では、スペイン語の前置詞に関わるある諸形式が他の形式へと移行する時期を Universidad de Alcalá の電子コーパス CODEA を利用して調べ、それが Corominas の主張する 13 世紀よりもかなり後であることを明らかにしようとする。cerca + N から cerca de + N への変化は 15 世紀以降であり、delante (de) + N は 16 世紀になってもなお揺れがあり、dentro + N から dentro de + N への変化は 16 世紀以降であるという。コーパス言語学を通時論に生かした研究である。

総合討議では、cerca de の de は起点を表す de との混同が生起のきっかけとなったのではないかという問いかけがなされた。また、新しい形式に前置詞 de が選択された理由についても議論が交わされた。

(2) 土屋亮「lo bastante 等の表現における lo の機能と発展について」

この発表では、副詞 bastante, suficientemente 等に中性定冠詞 lo が付く用法の成立過程を、Real Academia Española の電子コーパス CORDE を利用して探る。そし、元来、文法的な要請により用

いられていた *lo* が「～するために」を表す表現機能を担うに至ったのではないかとの提案を行なう。フランス語、イタリア語の定冠詞の用法についても触れられている。

総合討議では、*lo* を冠詞とみるかどうかについて、また定冠詞の「定性」について質疑応答があった。

(3) 寺崎英樹「スペイン語における不規則単純過去形の通時的変化」

スペイン語の直説法単純過去の不規則活用形態の通時上の大きな変化として、*haber* などからの類推の具現化と、*-i*、*-u* の成立が認められるが、それがいつ起きたのかは、従来突き詰めて取り上げられることがなかった。この発表では、電子コーパス CORDE に基づき、その変化が起きたのは 16 世紀から 17 世紀に移る間、即ち黄金世紀スペイン語の時代半ばに生じたことを明らかにしようとする。川崎の発表と同様、コーパス言語学を通時論に利用して結果を出した研究である。

総合討議では、形態の単純化に類推や使用頻度が果たした役割についての議論があった。またポルトガル語ではスペイン語と異なり、*haber* よりも *ter* が動詞の語形に及ぼした影響のほうが強い、といった対比も行なわれた。

(4) 今田良信「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」

発表者は、同一言語内の 2 つの共時態間の文法範疇や文法現象の違いを類型論的にとらえようとする「歴史言語類型論」を提唱しているが、この発表はその具体的適用例である。古フランス語と現代フランス語とは、指示詞の体系、平叙文の語順、疑問文の語順が異なる仕組みの構造に属することが示される。また付加形容詞と名詞の語順、格体系、冠詞体系についても言及されている。大きな視野を持った研究の一端の紹介である。

総合討議では、格、数などの体系や、異なる言語との類型論についての議論がなされた。

(5) 鈴木信五「イタリア語文構造の通時的変化」

この発表では、定動詞を基軸としてイタリア語の語順の通時的変化を考察する。テーマの機能を担う主語の位置が定動詞の前に定着していく過程と、接語は文頭に立てないという Tobler-Mussafia の法則が失効する過程とが、互いに影響を与えつつ進行し、古イタリア語の文構造が現代イタリア語のそれへと変化したことを例証する。情報構造と統語構造の相互作用を丁寧に分析した研究である。

総合討議では、主格代名詞の使用は強調によるものなのか、テーマと述語の関係をどう見るべきかなどについて討議が行われた。

§ 3 まとめ

5つの発表のうち3つがスペイン語に関するものであったが、総合討議ではその他の言語の専門家から多くの質問や意見が提出され、話題はロマンス諸語に広がった。また、適切に利用すれば電子コーパスが通時論の研究に役立つことが確認された。

一方、フランス語とイタリア語についての発表は、文の基本語順を扱った部分で共通性が見られた。両言語が「SV 語順の定置化」に向かう過程が示され、それを巡って活発な意見交換があった。今後、「ロマンス諸語の語順の通時的変化」のような統一テーマを設けて大会、研究会を実施することも有意義ではないかと思わせた。